

## 花嫁の靈性

### ベレーシート



●雅歌を、「花婿なるキリスト」と「キリストの花嫁である教会」との愛のかかわりを預言的に歌った歌として理解したいと思います。神とイスラエルとのかかわりは夫と妻の関係ですが、メシアであるイエシュアと教会のかかわりは花婿と花嫁の関係です。やがて妻であるイスラエルも神のご計画では最後の最後に夫婦として回復しますが、キリストの花嫁である教会は、イスラエルと同じ「妻」としての立場が約束された、いわば接ぎ木された共同相続人なのです。

●雅歌はヘブル語で「シール・ハッシーリーム」(סִיֵּר הַשִּׁירִים)で、直訳は「歌の中の歌」です。「多くの歌の中の最高傑作としての歌」、あるいは「珠玉の歌」を意味します。単数と複数形を並べた表現は、ヘブル特有の強調表現です。今回は1章1~4節までを味わいますが、その中に登場する「口づけ」「愛」「ぶどう酒」などの語彙が複数形として強調されています。

●「ソロモンの雅歌」(1節)とあれば、普通はソロモンが書いたと思われるが、必ずしも彼が書いたと理解する必要はありません。原文では「アシェル・リシュローモー」(הַשִּׁירִים לְשׁוֹלֹמֹן)とあり、これは「ソロモン流」とか、「ソロモン風」といった意味で、ソロモンという人物以上に、その名前がもっている語幹である三つの子音 **שלם** から醸し出される格調さに特徴づけられるのではないかと考えられます。

- (1) 動詞「シャーレーム」(שָׁלַם)・・・無傷である、完成する、報いる、償う、誓いを果たす。
- (2) 形容詞「シャーレーム」(שָׁלַם)・・・自然のままの、完全な、平和な、豊かな、全くひとつの。
- (3) 名詞「シェレム」(שָׁלַם)・・・交わりのいけにえ(神と人とがともに会食して交わるための)。
- (4) 固有名詞「シャーレーム」(שָׁלַם)・・・エルサレムの別称(創14:18「サレムの王メルキゼデク」)。
- (5) 固有名詞「シェローモー」(הַשִּׁירִים לְשׁוֹלֹמֹן)・・・ソロモン。
- (6) 固有名詞「シューラツミート」(שְׁוֹלֵמִית)・・・シュラムの女(雅6:13)「平和をつくる花嫁」
- (7) 名詞「シャーローム」(שָׁלוֹם)・・・神と人のかかわりの祝福を総括する語彙。平和、繁栄、十全、完全。

●以上のように見るなら、固有名詞の王である「ソロモン」はその一つの面でしかありません。神と人とのかかわりのイメージ、神のご計画の視点から見るイメージは、「ソロモン風的な格調を持つ」傷なきかかわりであり、ありのままの豊かなかかわりの回復であり、全く一つとされた十全で完全なかかわりであり、それがエルサレムにおいて、まことの王である方によって完成されるかかわりだと言えます。まさに「ソロモンの雅歌」の格調は、そのような愛のかかわりを歌った預言的な歌であると同時に、雅歌の全体の「タイトル」とも言えるのです。「雅歌」の存在の輝きは、その前に置かれている「伝道者の書」における悟り、

すなわち「空の空、すべては空」というこの世において、**心満たすものは、神との崇高な愛のかかわり以外にないという事実**を突き付けているように思われます。

●雅歌の特徴は、五感によって味わう語彙が多いということです。

- (1) 触覚・・「口づけ」 (2) 嗅覚・・「香油のかおり」(さまざまな香料)  
(3) 味覚・・「ぶどう酒」「甘い」 (4) 視覚・・「あなたの目は鳩のよう」 (5) 聴覚・・「愛する方の声」

●五感における象徴のすべてを通して味わう崇高な愛のかかわり、これが雅歌の世界です。雅歌には花婿のこトば以上に、花嫁のこトばが多く語られています。まさにブライダル・パラダイムを彷彿とさせる世界なのです。創世記 1 章 1 節に「はじめに神が天と地を創造された」とあります。聖書における「天」と「地」は、「神」と「人」を表しており、それはともに向かい合っている関係です。また地にあるすべてのものは、天にあるものの写しです。ということは、愛というかかわりの本体が天にあり、その本体の写しが地においてもあることを意味します。ヨハネの福音書の冒頭に、「初めにこトばがあった。こトばは神とともにあった。こトばは神であった」とありますが、その中にある「こトばは神とともにあった」というかかわりは重要です。「～とともに」の「ともに」に使われているギリシア語の「プロス」(πρός)は、「向かい合っているかかわりとしてのともに」を意味します。マイクが二本並列している「ともに」ではありません。天では御父と御子が向かい合っているのであり、その写しとしての地的現実が男と女(夫と妻、キリストと教会)のかかわりなのです。結婚の奥義は天にある「**プロスの神秘**」とつながっているのです。救いの究極は、黙示録 22 章 4 節の「御顔を仰ぎ見る」ことです。つまり、このかかわりの神秘を「雅歌」が啓示しているということです。

●「雅歌」の世界は、単なる男女を超越した天と地、神と人、夫と妻、花婿と花嫁が結び合っ一つとなる「エハード」(תְּהִי)の喜びの世界を描いています。いわば、神のご計画における「満足の中の満足」が「歌の中の歌」である雅歌の中に隠されているのです。

## 1. 花婿を慕い求める花嫁の霊性

【新改訳 2017】雅歌 1 章 2～3 節

- 2 あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく、  
3 あなたの香油は香り<sup>かんば</sup>芳しく、あなたの名は、注がれた香油のよう。  
そのため、おとめたちはあなたを愛しています。

●2 節から雅歌が始まります。登場人物の「私」は「花嫁」のことで、「あの方」「あなた」は「花婿」のことです。そして「おとめたち」は花嫁につながる諸国の民たち(異邦人)のことです。2～4 節は序文のような部分ですが、すでにそこにおいて花婿を慕い求める花嫁の霊性は明確に記されています。ここでは 2 節の前半「あの方が私に口づけしてくださったらよいのに」の部分にスポットを当ててみたいと思います。

## (1) 花婿の口づけを求める花嫁

【新改訳 2017】雅歌 1 章 2 節前半

あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。

●「口づけする」という動詞の「ナーシャク」(נָשַׁק)の未完了形が使われています。未完了形は願望・懇願・要請などを表しますから、ここでは「口づけしてほしい」という願いが言い表されています。「口づけ」と訳された「ネシーカー」(נִשְׂקָה)は、「あの方」である**花婿のことば**を意味しています。「口づけ」が複数形の「ネシーコート」(נִשְׂקָה)になっているのは、その渴望の熱烈さを表現するためのヘブル的強意法です。そのイメージを表すために、フランシスコ会訳では「熱い口づけ」と訳し、NEB 訳では「口づけでわたしを窒息させるほどに」と訳されているほどです。

●イスラエル建国の父にして初代首相であった ベン・グリオン氏は、「聖書を翻訳で読むのは、愛する恋人にハンカチーフの上からキスするようなもの」と言ったようですが、ここでの「口づけ」は、間に誰をも通さず、花婿との個人的・直接的なふれあいを願っています。これは訳語ではなく、原語で味わう世界のすばらしさがたとえられています。

●雅歌での「口づけ」は、父親が放蕩息子を抱いて口づけ(ルカ 15:20)したのとは異なります。その口づけは赦しと受容のしるしです。また、イスカリオテのユダがイエシュアにした「口づけ」とも異なります(マタイ 26:49)。そもそも「口づけ」するとは、花婿と花嫁が顔と顔を合わせてする行為です。「口づけ」は個人的な愛を表すものです。そのような関係を花嫁は持ちたいと願っているのです。それは神のみおしえ、あるいは花婿をとおして語られる神のことばの真意が直接的に啓示されることの強い願いを表しています。事実、花婿イエシュアの口から語られる一つひとつのことばは、「霊であり、いのち」です。花嫁が花婿の熱い口づけを求めるのは、花婿の心と思いを知ろうとする熱意のためです。**花嫁の唯一の願いは花婿を個人的に知ることなのです。**しかし今、花嫁は花婿の顔をぼんやりとしか見えていませんし、ことばの真意も一部分しか知らされていないのです(1 コリント 13:12)。しかしやがて花婿が来られて、顔と顔を合わせる時には、すべてをはっきりと見る(=知る)ことができるのです。花婿に対する愛は、神のことばの真意を求めることであり、またそれを切望することです。それが花嫁の霊性なのです。

●「あの方が私に口づけしてくださったらよいのに」という花嫁の霊性は、乳だけを飲む幼子のようにではなく、堅い食物を必要とする成熟した人のものです。乳を飲んでいる幼子は神とのより深いかわりを意味する義の教えに通じていません。またそれを求めようとしません。ですから、2 節のことばから、神のみことばの奥義が啓示されることを切に待ち望む花嫁の姿が浮かび上がってくるのです。それは花婿との直接的な口づけを通して、顔と顔を合わせる希求とも言えます。それゆえ、たましいではなく、霊によって花婿のことばを理解する必要があります。そのためには、霊の中の「直覚、交わり、良心」の機能を働かせる必要があります。

## (2) ぶどう酒に勝る花婿の愛

●2 節前半で「あの方が私に口づけしてくださったらよいのに」という花嫁の独り言が語られているのに対して、2 節後半では「あの方」から「あなた」に、つまり三人称から二人称へ変化しています。

【新改訳 2017】雅歌 1 章 2 節後半

あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく、

●「あなたの愛」(「ドデーハー」 אַהֶבָה)は女性側から愛する男性を指すときの呼称です。しかも「愛」(「ドード」 אָהַב)は雅歌では 39 回も使われており、複数形となっています。それは花婿に対する花嫁の熱烈な愛を表現するためです。「口づけ」も「愛」も複数形となり、かつ三人称を二人称に変えています。花婿の愛はこの世の喜びや楽しみを象徴する「ぶどう酒」よりもはるかに勝る、美しいものだと言われ告白しているのです。

●聖書における「ぶどう酒」は、「口づけ」と同様、人の心を喜ばす神のみおしえ(「トーラット・アドナイ」 הַיְהוָה אֱלֹהֵינוּ)の象徴でもあります。神のみおしえがなぜ「ぶどう酒」にたとえられるのかと言えば、それを飲む人の心を喜びで酔わせ、生命力を与えて、まなざしにも行動にも新しい輝きを帯びさせるからです。詩篇 19 篇がそのことを預言的に啓示しています。

【新改訳 2017】詩篇 19 篇 7~10 節(原文は 8~11 節)

7 【主】のおしえは完全で たましいを生き返らせ

【主】の証しは確かで 浅はかな者を賢くする。

8 【主】の戒めは真っ直ぐで 人の心を喜ばせ

【主】の仰せは清らかで 人の目を明るくする。(共同訳「目に光を与える」)

9 【主】からの恐れはきよく とこしえまでも変わらない。

【主】のさばきはまことであり ことごとく正しい。

10 それらは 金よりも 多くの純金よりも慕わしく (霊的視覚)

蜜よりも 蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。 (霊的味覚)

●神のみことば(主のおしえ、主の証し、主の戒め、主の仰せ)の効用の素晴らしさを、味覚にたとえて「甘い」と表現しています。つまり、7, 8 節で語られている「たましいを生き返らせ」「浅はかな者を賢くする」「人の心を喜ばせ」「人の目を明るくする」という表現を、ここでは「甘い」という一言で言い表しています。ここで使われている「甘い」は、形容詞の「マートーク」(מֵתוּק)で、旧約で 12 回、詩篇ではここだけです。「甘い」とは、美味しい、心地良いという意味です。箴言 16 章 24 節には「親切なことばは蜂蜜。たましいに甘く、骨を健やかにする」とあります。しかし神のみことばはそれ以上のものだといわれます。とりわけ、「それらは・蜜よりも蜜蜂の巣の滴りよりも甘い」とはどういうことでしょうか。「蜂蜜」だけでも十分に甘いはずですが、それ以上に甘く感じるためには適量の塩が入ることで甘さは一段と増し

ます。その塩とは奥義を含むことを意味しています。多くの奥義を啓示されたパウロが「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい」(コロサイ 4:6)とっていますが、この塩味の効いた甘いことばこそ、奥義を含んだことばなのです。

●まさにこのような甘いことばである【主】のみおしえ(トラー)を語ってくれるのは、「主のおしえを喜びとし、昼も夜も、そのおしえを口ずさむ人」(詩篇 1:2)、つまり「**その人**」(「ハーイーシュ」 שְׂרָיָה)しかいません。「その人」とは御父から遣わされる御子イエシュアです。そのイエシュアの口から出る数々のことば(「レーマ」 רֵמָא)は、「霊であり、いのち」(ヨハネ 6:63)をもたらす「ことば」です。いのちを与えるのは御霊です。すでにイエシュアは死からよみがえり、「いのちを与える御霊」となって私たちの霊を回復させ、私たちの霊の中に入って来て下さっています。それゆえ、イエシュアのことばは、私たちのたましいではなく、私たちの霊の中で聞くとときにいのちをもたらします。花婿なるイエシュアの数々のことばをひたすら求める花嫁の願い(希求・渴望)こそ、「**口づけしてくださったら**」というフレーズの真意なのです。

●神のトラーは決して命令や禁止事項や罰則を並べ立てたものではなく、本来は、人に対する神ご自身を啓示するものです。トラーを命令や禁止事項や罰則にしてしまったのは、パリサイ派や律法学者たちです。御子イエシュアはイザヤの「主のしもべの歌」にあるように、「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。…」(イザヤ 42:3~4)のために御父から遣わされました。メシアは神のトラーによって御国を治められます。そのために新創造された人の心の中に神のトラーを書き記し、さらに朽ちないからだに造り変えて、神のみこころを成就できるようにします(エレミヤ 31:33~34)。それゆえ御国においては、「喜びと楽しみ」が基調となります。その意味において、この世の喜びを象徴する「ぶどう酒」にまさる「あなたの愛」の複数形は「至上の愛」となるのです。雅歌における「ぶどう酒」(「ヤーイン」 יַיִן)は花婿の愛を引き立たせるに過ぎません(1:2, 1:4, 4:10, 5:1, 7:9, 8:2)。

### (3) 「あなたの名は注がれる香油のようにかぐわしい」

シエマー	トウーラク	シエメン	トーヴィーム	シエマーネーハー	レレーアツハ
שְׁמֶךָ	תּוֹרַק	שֶׁמֶן	טוֹבִים	שְׁמֶנֶךָ	לְרִיחַ
あなたの名は	注がれた	(香)油	<b>良い(かぐわしい)</b>	あなたの油は	香りのある
名詞単数	動詞	名詞単数	形容詞複数	複数	連語(単)・前置詞

●「香油」(「シエメン」 שֶׁמֶן)も神の愛を表す象徴です。「口づけ」も複数形でしたが、ここでも複数形が用いられています。つまり花婿はきわめてかぐわしい香油を注がれた存在なのです。「香り」(匂い)によって、ある特定の存在を指し示すことがあります。イエシュアが十字架の道を歩まれる直前に、イエシュアの話をついたベタニヤのマリアがイエシュアの埋葬のために香油を注いだ話は有名です。わずかな量でも

その香りは周囲にいる者たちに分かります。ところが、ナルドの香油の入った石膏のつぼを割ってイエシュアの頭に注いだのですから、香油の匂いは強烈に家中に漂ったはずで、しかもイエシュアの身体(頭髪、髭も含む)のみならず、衣服にもその香油の匂いが染み込んだはずで、ドロローサ(悲しみの道)の途上でも、十字架上でも、また埋葬される時にも、そのかぐわしい香りはイエシュアとともにあったのです。マリアのした行為は、まさにこのイエシュアこそ私たちの花婿としてかぐわしいお方であることを証したのです。

【新改訳 2017】 雅歌 1 章 3 節

あなたの香油は香り<sup>かんば</sup> 芳しく、あなたの名は、注がれた香油のよう。

そのため、おとめたちはあなたを愛しています。

●花婿の名はその香油のように<sup>かんば</sup> 芳しく、周囲にその存在を示します。花婿が花嫁に触れてくれるだけで、花婿の良い香りは花嫁にもうつります。「私たちは、・・神に<sup>かぐわ</sup> 献げられた 芳しいキリストの香りなのです」(Ⅱコリント 2:15)と使徒パウロが語ったように、キリストの香りによって、「おとめたちは花婿を慕い、花婿を愛する」ようになるのです。ここでの「おとめたち」とは**諸国の民**を意味しています。選ばれた花嫁は花婿の愛を一身に受けていますが、その愛のかかわりのすばらしさを見て、やがて異邦の諸国の民(「ゴーイム」<sup>גוֹיִם</sup>)も花婿を慕うようになることが預言されているのです。

## 2. 花婿は私たちの喜び、私たちの楽しみ

【新改訳 2017】 雅歌 1 章 4 節

**私**を引き寄せてください。

**私たち**はあなたの後から急いで参ります。

王は**私**を奥の間に伴われました。

**私たち**はあなたにあって楽しみ喜び、

あなたの愛をぶどう酒にまさってほめたたえます。

あなたは心から愛されています。

●雅歌の難しさは、だれが語っているのかという人称の同定です。それを見誤ると混乱するにもかわりなく、新改訳はそのことについて何も記していません。新共同訳、フランシスコ会訳・尾山訳は、親切に、だれが歌っているのか、「花嫁」なのか、「花婿」なのか、あるいは「おとめたち」なのかを記載しています。しかし必ずしもそれで括れていない部分があります。岩波訳も小見出しをつけていますが、人称については必ずしも明確にいません。いろいろな翻訳を見比べると、「雅歌」という書は実に難しい書なのだということが分かります。ですが、「御国の福音」という俯瞰的視点を外さずに、「花婿と花嫁」の愛の歌だという設定で読み進めていこうと思います。雅歌には神の多くの秘密が隠されているからです。ですから、「シーム・イエシュア」(=イエシュアの御名)という花婿の名を呼び求めつつ、読み進めましょう。

## (1) 婚姻における楽しみと喜び

●先に掲げた6行からなる4節の、1～2行目からして人称の難しさがあります。新改訳では花嫁なる「私」が花婿なる「あなた」に向かって「**引き寄せてください**」と嘆願しています(原文は命令形)。とすれば、2行目の「私たちはあなたの後から急いで参ります」の「私たち」とはだれなのかという疑問が起こります。フランススコ会訳は、「わたしを、あなたの後に引き寄せてください。さあ、一緒に走りましょう」と訳しています。つまり「一緒に」という訳語の中に花嫁と花婿の「私たち」という人称を含ませています。原文の「私たちは走りましょう」という表現を、花婿が引き寄せてくれるならば、どこにでも花婿について行きますという花嫁の意志が表明されているように訳しているのです。

●「引き寄せてください」との花嫁の願いに答えるかたちで、3行目の「王は**私**を奥の間に伴われました」とあります。花婿は花嫁を自分の部屋に連れて行ったのです。ここで「花婿」が「王」であることがはじめに明らかにされます。神のご計画においては、王なるメシアが花嫁を迎えに来ることで婚姻(結婚)が成立します。婚姻のあとで新婚の二人は予め花婿が準備しておいた家に行き、そこで愛の喜びを交わすということはきわめて自然です。「奥の間」と訳されていますが、原文では「彼の部屋」とあり、いわばそこはだれも割り込むことのできない「至聖所」(Secret Place)と言えます。あるいは、そこは霊の中とも言えます。

●問題は、4行目の「**私たちはあなたにあって楽しみ喜び**」の部分です。「あなたにあって」と訳された部分は、「あなたと共に」(新共同訳)、「あなたのもとで」(岩波訳)とも訳されます。原語の「**バーフ**」(בָּרַח)をどのように訳すかという問題です。結ばれた二人が新居で二人だけで過ごす中で「楽しみ喜んでいる」姿を思い浮かべると、この幸いのすべては花婿の主権性の中にあります。「私たち」という表現を花嫁がしたとしても、すべては花婿のおかげだという強い思いがあることにうなずけます。その意味での「バーフ」(בָּרַח)で、「花婿が準備してくれた家の中で、私たちは楽しみ喜びます」と了解することができると思います。

●そもそも「楽しむ」「喜ぶ」という動詞は婚礼や祝祭の際に用いられる語で、しばしばワンセットで使われます。それは「御国の喜び」を表すフレーズです。「楽しみ」と訳された原語は「ギール」(גִּיל)、**「喜ぶ」**と訳された原語は「サーマハ」(חֲמֻשׁ)、これらが1人称複数形「私たちは～」で使われると「ナーギーラー・ヴェニスメハー」(חֲמֻשִּׁי וְגִילִי וְנָאֲרָה וְנִסְמְחָה)となります。これは「ハーヴァー・ナーギーラー・ヴェニスメハー」(「さあ、私たちは踊って喜ぼう」חֲמֻשִּׁי וְגִילִי וְנָאֲרָה וְנִסְמְחָה)というイスラエルのフォークダンスの歌詞となります。「御国の基調は、楽しみ喜び」です。しかもそれをマイナー調で表します。

## (2) 婚姻の喜びにおとめたちも加わっている

4行目 **私たちはあなたにあって楽しみ喜び**、

5行目 (私たちは)あなたの愛をぶどう酒にまさってほめたたえます。

6行目 あなたは心から愛されています。

(原文=彼女たちはあなたを心から愛しています。)

●原文では、4節の4行目と5行目の主語は1人称複数の「私たちは」となっていますが、最後の6行目では主語が3人称女性複数の「彼女たちは」となっています。ところが、【新改訳2017】はあえてそれを訳していません。フランススコ会訳は6行目を花嫁のことばとして、「おとめたちが、あなたを愛するの当然です」と訳しています。これは3節で花婿の優れた愛が紹介された後の、「そのため、おとめたちはあなたを愛しています」と呼応しています。しかも4節の最後の6行目は「心から」と訳されています。原文は「まっすぐ、実直、正直、一筋」を意味する「ヨーシェル」(יֶשֶׁר)の複数形「メーシャーリーム」(רִמְיָשֵׁרִים)を使うことで、ここでもヘブルの強意法がなされています。花婿と花嫁の麗しいかわりを知ったおとめたち(=彼女たち)が、花婿を一筋に愛する(「アーハヴ」אָהַב)ようになるのは至極当然のことだという花嫁のことばなのです。このように、雅歌の最初から、花婿と花嫁の愛が強く打ち出されているのです。

## ベアハリート

●今回「雅歌」を取り上げた理由は、初めて開催される12月18~25日の「セレブレイト・ハヌッカー」に備えるためです。そもそもユダヤ教の「ハヌカの祭り」は「神殿奉獻祭」です。これにちなんで、「セレブレイト・ハヌッカー」の開催目的は、花婿の愛に対する花嫁の一途な愛による献身を新たにすることです。ユダヤ暦では今年は「ヨベルの年」に当たるようです。はからずも、私の信仰も50年目で「ヨベルの年」です。ヨベルの年は「原初に戻る」という意味を持ち、新たなことが始まることを意味しています。2022年は、私にとって不思議と多くの転機となることがもたらされました。私自身、考えてもいなかった数々のことが始まった年でもあります。

●10月9~16日には、「アシュレークラス」(AC)主催の「セレブレイト・スッコート」が行われました。そこで私は「14のアラカルト」を語りましたが、その内容はイエシュアによる一連の贖いの出来事の全貌です。それは主の導きの中で語られたものであり、昨年には決して語ることはできなかった内容です。そして、「原語から味わう創世記1章」の14回分の講義は新しい視点からの解釈としてまとめる機会となりました。「仮庵の祭り」を回復すること、さらにブライダル・パラダイムによる「花嫁の霊性」を回復すること、これらの二つの回復はエックレーシアにおける急務だと信じます。なぜなら、花婿イエシュアの再臨が近づいているからです。そのための備えを、「祭り」という形において回復する必要があると考えているのです。「雅歌」は堅い食物です。しかし堅い食物は成熟した者たちの霊の食物です。「シェーム・イエシュア」によって、この書を通してさらなる神の奥義に触れて行きたいと願っています。

**三一の神は私たちの霊とともにあります。**

2022/11/13